

蔵版目録の分析による刷年代識別法

——書肆須原屋市兵衛の蔵版目録を事例として——

松田 泰代

はじめに

日本における近世期の商業出版活動を検証する場合、法令文書、判決文書、組合文書、商品として作られた出版物およびその情報が、私文書以外の公的な史料として活用できると考える。法令文書としては、「御触書集成」⁽¹⁾、「撰要類集」⁽²⁾、判決文書としては「御仕置例類書」⁽³⁾、「徳川禁令考」⁽⁴⁾、「市中取締類集」⁽⁵⁾があげられる。組合文書としては、「大坂本屋仲間記録」⁽⁶⁾に代表されるような、「規定書」「名簿」「記録簿」などがあげられる。

商業出版活動を考えるにあたり現存する書籍の書誌情報、すなわち国書総目録や図書館などの蔵書目録からの

考察では当時流通したすべての出版物を網羅できない。当時流通した商業出版物の総目録および出版者の目録である「書籍目録」⁽⁷⁾や、開版や販売許可の記録簿である「開板御願書」⁽⁸⁾、「割印帳」⁽⁹⁾、書籍広告、貸本屋の目録などが、近世の出版文化を考える上での素材として有用ではないかと考える。

この論文では、書籍の巻末に付された書物案内である書籍広告、とりわけ蔵版目録（書目）を史料として活用する方法を提示する。第一に、この論文の目的は一つの方法論の提示であるので、導きだされた結論が過去に別の方法で得られた結果と同じになるかを検証する。第二に、書籍が市場に出された刷年代を判定できる史料としての意味付けをおこなう。

1 書籍広告としての蔵版目録

書籍の巻末に付与された書籍広告の種類には、出版予告、著者単位の目録、主題単位の目録、蔵版目録が見られる。時代を追ってみると、単なる出版予告から、著作単位、主題単位、書肆の既刻・嗣刻の書籍を掲載する体裁の蔵版目録に進化していく過程が窺える。

書籍の巻末に付与された書籍広告は、未刊本、伝本不明本、別書名や刊行年次などの推定がおこなえて、資料価値が高い⁽¹⁰⁾と評価されている。また近世の出版文化を研究する上で、蔵版目録が大きな意味を持つ⁽¹¹⁾とも言われている。筆者は、書籍巻末の蔵版目録はその書籍が作製される市場に出された時点での出版者の出版状況や板木保有状況がわかる材料として、意味があると位置づけている。また、逆に応用すると蔵版目録に記載されている書誌情報により、出版者の出版状況や板木保有状況が窺え、その書籍が市場に出された大まかな年代判定ができる材料として意味がある⁽¹²⁾と考える。

書籍広告を収集した書物として、国立国会図書館所蔵

『雪有香』（流通書名「雪有香蒐集書目」）があり、この資料を版元別に編集した書籍『近世出版広告集成』⁽¹²⁾がある。往来物に掲載された書籍広告を中心に収録した小泉吉永の『近世蔵版目録集成…往来物編』⁽¹³⁾がある。小泉吉永は「『近世蔵版目録集成（往来物編）』の編集を終えて」⁽¹⁴⁾の中で、マクロ的視点による蔵版目録の研究、例えば「同年代あるいは同一板元の広告、年代による広告の変化、蔵版者の変更に伴う広告の修正等々、視点を定めて見ていく」ことの意義に付言している。

ひとつの出版者（板元）に着目して蔵版目録をみていくと類似した蔵版目録が微妙に違っていることに気がつく。「板木が違うもの」と「板木は同じだが、改変されているもの」に分けられる。そして、「板木が違うもの」は「版面が似て非なるもの」と「版面は全く同じだが、彫りの違うもの」に分けられ、「板木は同じだが、改変されているもの」は「蔵版者の出版事項（所在情報）が違うもの」「掲載書籍が埋木・削除等で変化しているもの」という内容の違いがあげられる。

筆者は、それぞれの書籍の巻末に付与された蔵版目録の変化に着目して、それら書籍が市場に出された時期の

〈表一〉 蔵版目録の種類

板木が違うもの		版面が似て非なるもの	類(似)版
		版面は全く同じだが、彫りの違うもの	異版
板木は同じだが、改変されているもの			
蔵版者の出版事項が違うもの		修正版	
掲載書籍が埋木・削除等で変化しているもの		改訂版	

前後関係を判断する方法を試みる。この方法論により書肆の営業活動、具体的には営業地の変化について付言する。そして、類似蔵版目録を比較することでも様々な情報が得られる事例報告をあわせて行なう。

2 『解体新書』の刊記情報

『解体新書』は、序図一冊と本文四冊からなる計五冊一三四丁の大本の書物である。安永三年(一七七四)中秋に上梓され、献上本が配られた。のちに市兵衛より安永四年九月廿七日に販売手続きがとられ一般に流布することになる。

『解体新書』の内容についての研究は、岩崎克己、小川鼎三、緒方富雄、酒井亘、酒井シヅなどの医学者や片桐一男によって、翻訳の誤りや訳語についての研究、注釈に使われた書物の研究はかなり進んでおり、また、『ターヘル・アナトミア』以外から採用された扉絵や解剖図の研究もなされている。これらの先行研究によって『解体新書』の出版経緯やその内容、歴史的な意義が明らかにされている。¹⁵⁾

しかし、書誌学的な媒体の研究や出版者である市兵衛に関する研究成果の普及は進んでいないのが現状である。たとえば、京都教育大学の広報誌『Yokyo』一一三号(二〇〇四・三)には、「医史学の専門家で解体新書に詳しい順天堂大学客員教授の酒井シヅ先生にお聞きすると、「住所に関して、三町目から二町目に移転したとする移転説もあるが、移転事実の証拠は見つかっていない。須原屋市兵衛は始めからずっと三町目に住んでいたと思う。何かの理由によって当初の解体新書は「室町二町目」と記して刊本され、その後正しく「室町三町目」に手直したものが刊行されたのではないか。だから「二町目」と記されているものは初刷本に近いと思う」とのことです。」

との記述⁽¹⁶⁾があり、また鷲尾厚のように三丁目の刊記をもつ『解体新書』が存在することを知らずに論じ、蔵版目録についても独自の論を展開している文献⁽¹⁷⁾もある。市兵衛に関しても、「東京人」二四六号（二〇〇七・一一）の「葛屋重三郎と須原屋市兵衛」という記事の中ではいまだに「市兵衛は宝暦十年から文化八（一八一）年に没するまでの五十二年間に、二百点にも上る本を出版しました」との表現がなされているのが現状である。市兵衛が三代に渡り、一代目が安永八年五月六日病気で、三代目と文が文政六年八月九日に亡くなっているという事実⁽¹⁸⁾が埋もれてしまっている。ちなみに、二代目宗和は文化八年六月九日に亡くなっている。

『解体新書』の刊記にある出版者住所情報には、現在のところ「室町二丁目」と「室町三丁目」を確認しているが、どちらが、先に販売されたものか」という問いに対する解決方法は、公文書、およびそれに準ずる記録文書の調査からのアプローチ、市兵衛が販売した出版物の調査からのアプローチが考えられる。出版物の調査方法にも、「割印帳」に記録されている日付順に市兵衛の出版物に記載されている刊記情報を追って行くという方法と

出版物に記載されている刊記情報と蔵版目録を一对とし、その蔵版目録の変化を探ることによって明らかにするという方法がある。前者は、初刷かできるだけそれに近い書籍を見極めて検討材料として扱わなければならない。次の第三節では、室町三丁目と室町二丁目の刊記をもつ『解体新書』に付けられている蔵版目録の改訂版を比較検討することで、その前後関係を明らかにする。

3 書肆須原屋市兵衛の蔵版目録

現在、市兵衛の出版物の中で、蔵版目録六種と著作者の関連文献広告六種を確認している。『解体新書』に付けられている蔵版目録は、その内の二種である。その内の一種である「大本用短冊形二段八行蔵版目録」では四類の改訂版を確認している。『解体新書』以外の本から発見した版も含めると、この蔵版目録は五類を確認している。もう一方の一種である「大本用長方形型二段不定行蔵版目録」は、印刷博物館所蔵の『解体新書』につけられていた蔵版目録である。

「大本用長方形型二段不定行蔵版目録」に記載されて

いる書籍の検討を行い、「大本用短冊形二段八行蔵版目録」から「大本用長方形型二段不定行蔵版目録」が使われ頒布した時期について考察を行う。また、当初は「東藻会彙」と題され、後刷りでは「(増補)地名箋」にかわる書籍には「大本用短冊形二段八行蔵版目録」と類似する「小本用短冊形二段七行蔵版目録」がつけられている。その掲載内容から類推すると、「大本用短冊形二段八行蔵版目録」にはあと数種類の改訂版が存在する可能性があることを提示する。

(1) 『解体新書』巻末蔵版目録「大本用

短冊形二段八行蔵版目録」の改訂版比較

「大本用短冊形二段八行蔵版目録」に記載されている書籍名を改訂版ごとにまとめ、五類の変化と組み合わせの違いを含めた六つの事例を整理した表が、「表二」『解体新書』に付けられている。「大本用短冊形二段八行蔵版目録」とその改訂版」である。表にまとめるとその変化は一目瞭然である。最初の部分は変化がないが、注目したいのは最後の部分の変化であり、二丁表上段部分であ

る。そして、削除されている書名が五つみられることである。

この五類は、二丁表上段に『文のしるべ』が記載されている集合と『文栞』が記載されている集合にわけ、近刻の予告の『文のしるべ』が『文栞』に差し替えられたと判断できることにより、『文のしるべ』の集合が先に作成されたもので、『文栞』の集合が後に出版されたものと決定した。江戸の書物問屋が記録していた販売許可を与えた帳簿である割印帳を調べてみると、『文栞』は安永七年三月廿六日に割印を受けていることが判る。よって、近刻予告の『文のしるべ』が『文栞』に差し替えられるのは、安永七年三月廿六日以降と考えられる。

『文のしるべ』の集合には、出版者の住所表示があるものと、その部分が削られ埋木されて四つの書名が増加しているものに区別できる。書名部分を削除してわざわざ埋木して出版者住所に彫り直すことは考えられないので、出版者住所のあるものを第一番目と決定し、書名に置き換わった改訂版を第二番目とした。

『文栞』の集合には、第二番目と決定した版より『文栞』に変わっただけのもの、丁数が増え書名が増加した

一丁表上段								住所		
志道軒傳	根なし草	岩手山	硯の筏	桑岡集	其角雑談集	芭蕉桐の一片	俳諧明題集	室町三丁目	『古言梯』 国立国会図書館所蔵	第一番目
志道軒傳	根なし草	岩手山	硯の筏	桑岡集	其角雑談集	芭蕉桐の一片	俳諧明題集	室町三丁目	『解体新書』 京都大学附属図書館所蔵 7105/カ/22	第二番目
志道軒傳	根なし草	岩手山	硯の筏	桑岡集	其角雑談集	芭蕉桐の一片	俳諧明題集	室町三丁目	『解体新書』 京都大学附属図書館所蔵 7105/カ/10	第三番目
志道軒傳	根なし草	岩手山	硯の筏	桑岡集	其角雑談集	芭蕉桐の一片	俳諧明題集	室町三丁目	『解体新書』 杏雨書屋所蔵 常陸六三	第四番目
志道軒傳	根なし草	岩手山	硯の筏	桑岡集	其角雑談集	芭蕉桐の一片	俳諧明題集	室町三丁目	『解体新書』 杏雨書屋所蔵 杏雨一五二	第五番目
志道軒傳	根なし草	岩手山	硯の筏	桑岡集	其角雑談集	芭蕉桐の一片	俳諧明題集	室町二丁目	『解体新書』 角館図書館所蔵	第六番目

〈表二〉 『解体新書』に付けられている「大本用短冊形二段八行蔵版目録」とその改訂版

ものと、書名が削られ空欄になってしまっているもの
わけられる。全体の集合からみると、書名がある集合は

三類であるのに対して、二丁裏の書名が削除されたもの
は一類になる。増減の推移を考えると、書名が削除され

一丁裏上段							一丁表下段								
太史華句	易學辨疑	王元美尺牘	陸賈新語	經義折衷	大疑錄	龍門先生文集	左傳屬事	俳諧不斷櫻	水のゆくえ	寒葉齋畫譜	はし書ふり	哥文要語	片歌舊宜集	片歌草のはり道	片歌道のはじめ 二夜問答
太史華句	易學辨疑	王元美尺牘	陸賈新語	經義折衷	大疑錄	龍門先生文集	左傳屬事	俳諧不斷櫻	水のゆくえ	寒葉齋畫譜	はし書ふり	哥文要語	片歌舊宜集	片歌草のはり道	片歌道のはじめ 二夜問答
太史華句	易學辨疑	王元美尺牘	陸賈新語	經義折衷	大疑錄	龍門先生文集	左傳屬事	俳諧不斷櫻	水のゆくえ	寒葉齋畫譜	はし書ふり	哥文要語	片歌舊宜集	片歌草のはり道	片歌道のはじめ 二夜問答
太史華句	易學辨疑	王元美尺牘	陸賈新語	經義折衷	大疑錄	龍門先生文集	左傳屬事	俳諧不斷櫻	水のゆくえ	寒葉齋畫譜	はし書ふり	哥文要語	片歌舊宜集	片歌草のはり道	片歌道のはじめ 二夜問答
太史華句	易學辨疑	王元美尺牘	陸賈新語	經義折衷	大疑錄	龍門先生文集	左傳屬事	俳諧不斷櫻	水のゆくえ	寒葉齋畫譜	はし書ふり	哥文要語	片歌舊宜集	片歌草のはり道	片歌道のはじめ 二夜問答
太史華句	易學辨疑	王元美尺牘	陸賈新語	經義折衷	大疑錄	龍門先生文集	左傳屬事	俳諧不斷櫻	水のゆくえ	寒葉齋畫譜	はし書ふり	哥文要語	片歌舊宜集	片歌草のはり道	片歌道のはじめ 二夜問答
太史華句	易學辨疑	王元美尺牘	陸賈新語	經義折衷	大疑錄	龍門先生文集	左傳屬事	俳諧不斷櫻	水のゆくえ	寒葉齋畫譜	はし書ふり	哥文要語	片歌舊宜集	片歌草のはり道	片歌道のはじめ 二夜問答

二丁表上段							一丁裏下段								
信濃地名考	民間備荒録	しっぽく料理集	文のしるべ 近刻	百人一首解	古言梯	生花千筋籠	抛入花の園	石印集誼	字畫淵海	猿橋碑銘	六體千字文	十體千字文	物類品隲	歴代事跡圖	大明十三省圖 萬国一器界圖
信濃地名考	民間備荒録	しっぽく料理集	文のしるべ 近刻	百人一首解	古言梯	生花千筋籠	抛入花の園	石印集誼	字畫淵海	猿橋碑銘	六體千字文	十體千字文	物類品隲	歴代事跡圖	大明十三省圖 萬国一器界圖
信濃地名考	民間備荒録	しっぽく料理集	文菜	百人一首解	古言梯	生花千筋籠	抛入花の園	石印集誼	字畫淵海	猿橋碑銘	六體千字文	十體千字文	物類品隲	歴代事跡圖	大明十三省圖 萬国一器界圖
信濃地名考	民間備荒録	しっぽく料理集	文菜	百人一首解	古言梯	生花千筋籠	抛入花の園	石印集誼	字畫淵海	猿橋碑銘	六體千字文	十體千字文	物類品隲	歴代事跡圖	大明十三省圖 萬国一器界圖
信濃地名考	民間備荒録	しっぽく料理集	文菜	百人一首解	古言梯	生花千筋籠	抛入花の園	石印集誼	字畫淵海	猿橋碑銘	六體千字文	十體千字文	物類品隲	歴代事跡圖	大明十三省圖 萬国一器界圖
信濃地名考	民間備荒録	しっぽく料理集	文菜	百人一首解	古言梯	生花千筋籠	抛入花の園	石印集誼	字畫淵海	猿橋碑銘	六體千字文	十體千字文	物類品隲	歴代事跡圖	大明十三省圖 萬国一器界圖
信濃地名考	民間備荒録	しっぽく料理集	文菜	百人一首解	古言梯	生花千筋籠	抛入花の園	石印集誼	字畫淵海	猿橋碑銘	六體千字文	十體千字文	物類品隲	歴代事跡圖	大明十三省圖 萬国一器界圖

二丁裏上段							二丁表下段								
	注(一) 市隱草堂集	名物画譜	解體約圖	解體新書	遊戲画帖	唐摹真本十七帖	七觀音經	常磐帖	五筆法帖	詩學小成	大東地名箋	唐明詩鍵	笑府	小説土平傳	寢惚先生文集
詩学楷梯	市隱草堂集	名物画譜	解體約圖	解體新書	遊戲画帖	唐摹真本十七帖	七觀音經	常磐帖	五筆法帖	詩學小成	大東地名箋	唐明詩鍵	笑府	小説土平傳	寢惚先生文集
詩学楷梯	市隱草堂集	名物画譜	解體約圖	解體新書	遊戲画帖	唐摹真本十七帖	七觀音經	常磐帖	五筆法帖	詩學小成	大東地名箋	唐明詩鍵	笑府	小説土平傳	寢惚先生文集
詩学楷梯	市隱草堂集	名物画譜	解體約圖	解體新書	遊戲画帖	唐摹真本十七帖	七觀音經	常磐帖	五筆法帖	詩學小成	大東地名箋	唐明詩鍵	笑府	小説土平傳	寢惚先生文集
詩学楷梯		名物画譜	解體約圖	解體新書		唐摹真本十七帖	七觀音經	常磐帖	五筆法帖	詩學小成	大東地名箋	唐明詩鍵	笑府	小説土平傳	寢惚先生文集
詩学楷梯		名物画譜	解體約圖	解體新書		唐摹真本十七帖	七觀音經	常磐帖	五筆法帖	詩學小成	大東地名箋	唐明詩鍵	笑府	小説土平傳	寢惚先生文集

三丁表上段							二丁裏下段							
							注(一)	繪本いろは歌	郊華集	四溟陳人詩集	西遊紀行	外科撮要	療治茶談	
							誹諧名所方角集	繪本せつの時	繪本いろは歌	郊華集	四溟陳人詩集	西遊紀行	外科撮要	療治茶談
〈未刻〉	翻譯萬國圖	文字	歐陽詢千字文	種痘方	江戸図鑑	古今句鑑	誹諧名所方角集	繪本せつの時	繪本いろは歌	郊華集	四溟陳人詩集	西遊紀行	外科撮要	療治茶談
							誹諧名所方角集	繪本せつの時	繪本いろは歌	郊華集	四溟陳人詩集	西遊紀行	外科撮要	療治茶談
							誹諧名所方角集	繪本せつの時	繪本いろは歌				外科撮要	療治茶談
							誹諧名所方角集	繪本せつの時	繪本いろは歌				外科撮要	療治茶談

三丁表下段					
大成年代広記	滝本書札	向風草	今日哥集	四声韻選	古詩絶句
					(未刻)

注(へ) 2段抜きで「日本橋北室町三丁目／東都書肆 須原屋市兵衛」と記載されている。

たものが最後のものと考えられる。次に、『文葉』に変わっただけのもの、丁数が増え書名が増したものの前後関係を考える必要がある。『文葉』に変わっただけのものから丁数が増え書名が増したものへ変化したと考えるのが自然かもしれないが、この事例で版面を比較して考えた場合、丁数が増え書名が増したものが先の刷で、『文葉』に変わっただけのものが後の刷と判定できる。判断の根拠になるのは、『文葉』に変わっただけのものである

杏雨書屋所蔵常陸本(請求記号常陸六三)の二丁表上段『信濃地名考』左側の線が一部欠けていること(図版一)である。丁数が増え書名が増したものである京都大学附属図書館所蔵本(請求記号七一〇五/カ/一〇)(図版二)と書名が削られ空欄になってしまっているものである。杏雨書屋所蔵西宮本(請求記号杏雨一五二)(図版三)を比較してみると、まっすぐな欠けのない線(図版二)が、欠けた部分が鮮明な線(図版一)となり、残っている

る線の部分が摩耗して形状が変化した線（図版三）を確認でき、その変遷が偲ばれる。よって、丁数が増えたものを第三番目、『文葉』に変わっただけのものを第四番目と決定した。

五類の変化の順番を決定したが、第五番目の蔵版目録には本体の刊記情報との組み合わせの違いが二組ある。

この論文の最初の命題である室町三丁目と室町二丁目
の刊記をもつ『解体新書』にそれぞれつけられているのである。この蔵版目録の五類の変遷順番付けの結果、および五類の蔵版目録が室町三丁目の刊記をもつ『解体新書』につけられていることから、三丁目から二丁目へ移転したことが窺える。よって、室町三丁目の刊記をもつ『解体新書』のほうに先に販売された書籍であると結論づけらる。

尚、公文書、およびそれに準ずる記録文書の調査から市兵衛が三丁目から二丁目に移転したことを確認している。

「安永撰要類集」に収録されている文書の中で市兵衛が記録されているものに次のものがある。

一つは、寛政元酉（一七八九）年五月に「大学或問と申

書物板行売弘之儀二付、書物問屋行事共同出候儀申上候書付」として、町年寄である奈良屋市右衛門とともに三組の行事仲間が申出した記録文書である。通町組の行事出雲寺和泉と中通組の行事松本屋平助と共に、南組の行事として市兵衛の記載が「南組同行事 室町三丁目 須原屋 市兵衛」とある。四月十五日に和泉、市兵衛、平助が奈良屋市右衛門へ送った文書も記録されている。

二つめは、前の文書に対する仰渡書で、寛政元酉年六月三日の日付で「牧野備後守殿え丹阿弥を以て上候処、承付致候様、御下ヶ被成候二付、同四日承付致、秋山松之丞を以て返上」「書物問屋行事共申出候二付、奉伺候書付」という項目であげられている文書に、「南組同（書物問屋）行事 室町三丁目 須原屋 市兵衛」の記録が見られる。これは、四月十五日時点での記載住所の転記と考えられる。しかし五月に奈良屋から申出が出される時点で、営業地の移転があれば報告がなされていると考えらる。

「安永撰要類集」の事例から寛政元年四月から六月の時期に市兵衛は室町三丁目で営業していたものと考えられる。

寛政四年の林子平の『海国兵談』の絶版事件に連座して、『三國通覧図説』を出版した市兵衛も同書において絶版と罰金を被った。この事件に関する文書⁽¹⁹⁾によると、市兵衛はこの時点において、室町二丁目權八店で営業していたことがわかる。また、權八店とあることより土地持ちでも借地持家でなく、店舗を權八より借りて経営していたことがわかる。

以上より、寛政元年四月から六月の時点では室町三丁目で営業しており、寛政四年五月十六日の時点ではすでに室町二丁目で営業していた。室町二丁目への移転は、『三國通覧図説』の罰金が原因で営業困難になり移転したのではないことがわかった。

割印帳のデータをもとにした出版物調査では、『怪異前席夜話』の刊記には「寛政二年庚戌春正月／江戸室町三丁目／須原屋市兵衛」と記載されており、割印日は寛政二年三月廿六日である。『琉球談』は、国立公文書館内閣文庫所蔵三種類（請求記号178-493、178-494、178-492）と国立国会図書館所蔵二種類（M327-N1、特7-545）の閲覧をおこなった。これらの調査により寛政二年に市兵衛によって開版されているが、寛政七年六月に京都に版權

が移っていることが国立公文書館内閣文庫所蔵本（請求記号178-504）の刊記「寛政二年刻成／同七年卯六月求板／二条通柳馬場東入／皇都書林 林伊兵衛」によってわかる。市兵衛によって出版された『琉球談』は美しい丹表紙であり、市兵衛の跋文と一丁分の書籍広告「森寫中良先生著述書目」が付く。跋文の最後の部分に「寛政二年九月 書林 申椒堂⁽²⁰⁾主人誌」とあり、「森寫中良先生著述書目」の最後の部分には「日本橋北室町二丁目／東都書肆 須原屋市兵衛梓」と記述されている。割印帳の記載では、割印日は寛政二年十月廿一日で墨付五十二丁ある。序二丁、目録一丁、本文四十二丁、附録二條五丁、跋一丁で計五十一丁となり、「森寫中良先生著述書目」を数えないと五十二丁にならない。これらの結果により、寛政二年に営業地が三丁目から二丁目に変わったと考えられる。

室町三丁目と室町二丁目の刊記をもつ『解体新書』に付けられている蔵版目録の改訂版を比較検討することで得られた結果は、公文書、およびそれに準ずる記録文書の調査から得られた結果と、「割印帳」に記録されている日付順に市兵衛の出版物に記載されている刊記情報を追

って行く方法で得られた結果と同一の結果が得られた。

(2) 印刷博物館所蔵『解体新書』の蔵版目録

「大本用長方形型二段不定行蔵版目録」

「大本用長方形型二段不定行蔵版目録」は、「大本用短冊形二段八行蔵版目録」が均等幅の行で構成されているのに対し、掲載情報の分量に応じて幅が変化する構成になっており、均等幅の場合は十行が納められている。掲載されている書籍名から判断すると、「大本用短冊形二段八行蔵版目録」と同じく真行草様々な書体で本の格を示した多種多様の書籍が掲載されている。その掲載量は「大本用短冊形二段八行蔵版目録」が掲載量の多い第三番目のもので二丁半であるのに対して、「大本用長方形型二段不定行蔵版目録」では四丁となり、その内容が充実していることが判る。また「大本用短冊形二段八行蔵版目録」の第一番目では、蔵版目録末に「日本橋北室町三丁目／東都書肆 須原屋市兵衛」と記載されているのに対して、「大本用長方形型二段不定行蔵版目録」では、蔵版目録の最初に「東都書林 申椒堂 江戸日本橋室町二丁目西

側／須原屋市兵衛 板」と記載されており、市兵衛が室町二丁目で営業活動をしていた時期のものと判る。前述したとおり公文書、およびそれに準ずる記録文書の調査、割印帳のデータをもとにした出版物調査の結果、移転は寛政二年の時期と考えられるので寛政二年以降に製作された蔵版目録といえる。

「大本用長方形型二段不定行蔵版目録」で丁数が増加し、新しく掲載されるようになった書籍もあるが、一方で掲載されなくなった書籍も存在する。それらの関係をまとめた表が、(表三)『解体新書』に付されていた二種の蔵版目録比較である。全体としては、八十タイトルから一二四タイトルと掲載量が増え、四十四タイトル分の増加がみられる。中身を見てみると、『市隱草堂集』『向風草』『療治茶談』のように続編が新たに追加された書籍もある。そして中身の変化を追ってみると三十三タイトルの書籍が削除されており、実質上、新たに追加されたタイトルは七十七タイトルとなる。

たとえば、「大本用短冊形二段八行蔵版目録」の五類ともに掲載されており、「大本用長方形型二段不定行蔵版目録」で削除された『物類品隲』に着目してみる。

『物類品隣』は宝暦十三年七月に開版され、明和元年六月二十五日以降に販売され、「松籟館藏板」「赤井館藏板」「青藜館／種玉堂合梓」の三種が存在する。⁽²¹⁾

大阪本屋仲間の記録簿に「寛政二戌年改正板木総目録株帳」（住吉大社御文庫所蔵）、「文化九壬申年板木総目録株帳」（大阪府立図書館寄託）がある。前者は、天明六年から作成作業が進められ、寛政二年九月二十日に完成した。⁽²²⁾ 台帳としての機能を持つので、最新情報が加除されている。後者は様々な墨印、朱印、青印が押されており、台帳改めや、改訂を行っていたことが窺える。青印は、文化九年改正簿冊すなわち「文化九壬申年板木総目録株帳」への転記を示すものであるといわれている。後者は、柱刻に「文化九壬申歳改正 大坂書林板木目録」とあるので、「文化九壬申年板木総目録株帳」という書名で流通しているが、「簿冊の各冊裏返しには「自文化九年壬申年改正／文化十五年戊寅年正月出来」とあるから、調査を重ねながらの新簿冊への書き替え作業は、文化十五年までおよんだと考えられる」といわれており、浜田啓介の調査では、その後の記載は明治三年におよぶ⁽²⁵⁾ という。従い、明治三年まで台帳としての機能を担っていたと考

えられる。

これらの史料により「松籟館藏板」から「赤井館藏板」への変化は、板木が江戸から大阪に移ったことに起因し、その時期は明和二年八月五日以降寛政二年九月二十日以前の期間であることが判る。⁽²⁶⁾ よって、『物類品隣』が記載されていない「大本用長方形型二段不定行藏版目録」は『物類品隣』の板木が大阪へ流れた後に作製されたと考えられる。また、市兵衛が室町二丁目で営業していた時期の藏版目録であることから、寛政二年以降に使われていたことが裏付けされる。

次に、『古今名物類聚』に着目してみる。『古今名物類聚』は、松平不昧が陶斎尚古老人の名で刊行した茶の湯の名物道具の図説である。その出版は五回に渡り、計十八冊で構成されている。その内容と「割印帳」から割印日の日付を拾い上げると次のようになる。

茶入の部 七冊

中興名物 五冊 割印日 寛政三年十二月二十五日

一 唐物

二 古瀬戸春慶

三 藤四郎、藤四春郎慶

四 金華山

五 破鳳

四 香炉、台、盆、香合

裂の部 二冊 割印日 寛政三年十二月二十五日

一 緞子、金欄

二 間道、雑載

大名物 二冊 割印日 寛政二年三月二十六日

計十八冊

一 唐物

二 古瀬戸

雑の部

五冊 割印日 寛政六年九月二十九日

一 後窯国焼能類

二 天目茶碗之類

三 楽焼茶碗之類

四 茶杓、花入、茶箱

五 水指、釜、硯

拾遺の部 四冊 割印日 寛政九年六月二十五日

一 藤四郎、金華山、破風

二 唐物、古瀬戸、春慶

三 掛物、歌の物、小倉色紙、墨跡

「大本用長方形型二段不定行蔵版目録」には、最後に発行された「拾遺の部」の4冊が記載されておらず、第四回目に発行された「雑の部」が収録されていることより、寛政六年九月二十九日以降寛政九年六月二十五日以前の間に流通した蔵版目録と考えられる。

『和歌磯の千種』は割印帳の寛政八年七月十七日に記録されていることから、それ以降にこの蔵版目録は成立したと考えられる。²⁷⁾

これらの結果より、印刷博物館所蔵の『解体新書』は寛政八年から九年ごろ市場に送り出された書籍と考えられる。また、この「大本用長方形型二段不定行蔵版目録」が使われ頒布した時期は寛政八年から九年ごろと結論づける。

4 「大本用短冊形二段八行蔵版目録」の 改訂版使用年代に関する考察

「大本用短冊形二段八行蔵版目録」の五類の比較を3節でおこなったが、それぞれの成立可能年代はどれくらいか。記載されている書籍の発行年を、割印帳、割印帳に記録されていない書籍や一枚ものなど割印日がわからない場合は日本古典総合目録データベース調査を行い、示されている刊年や序に記載されている年をまとめたのが、〈表4〉「大本用短冊形二段八行蔵版目録」にみえる書籍の割印日もしくは刊年調査である。

第一番目と第二番目の差である増加部分を検討してみると、安永四年十二月廿五日に割印を受けた書籍が記載されている。よって第二番目は、安永四年十二月廿五日以降に作成されたと考えられる。

第二番目と第三番目の差は、近刻の予告の『文のしるべ』が『文集』に差し替えられた部分と三丁目の増加である。増加部分の書籍の出版年について書名から同定することが難しくすべてを確定できないが、『文集』に差し

替えられたことから第三番目は安永七年三月廿六日以降に作成されたと考えられる。また割印帳から収集できた情報だけで考えると、安永七年六月廿六日以降の作成ともいえる。

第三番目と第四番目の違いは、掲載されている書名が削除されていることである。板木の流れの情報をつかまないといつ削除されたか判明しないが、逆に削除されていることから、これらの書籍は二丁目に移転する以前、すなわち寛政二年以前に市兵衛の取り扱い書籍ではなくなっていたことが判る。

『翻譯萬國圖』『大成年代広記』『向風草』『古詩絶句』については、慎重に検討しなければならぬ。割印帳に記載がない、条件があわなないなど見過ごせない問題が存在する。

まず、『大成年代広記』と『向風草』は割印帳に記載されているが、どちらもそれ以前に成立している可能性がみてとれる。『大成年代広記』は天明四年九月廿六日に最初に割印帳に記載されてから、寛政元年十二月廿五日、寛政五年九月、寛政七年十一月廿日と計四回掲載されている。しかし、最初の天明四年の時には、既に「再板」

と記載されている点に気がかかる。天明四年九月廿六日以前に存在していた最初の『大成年代広記』が記載されている可能性が残る。『向風草』は割印帳の天明四年三月廿六日の日付ではじめて現れるが、この時の記録では二篇全三冊とあり、この蔵版目録で掲載されているものは二冊なので冊数が合わない。この蔵版目録では初篇を掲載していると考えられる。するとその年代は、『大成年代広記』と『向風草』どちらも天明四年以前ではないかと考えられる。

次に、『翻譯萬国圖』と『古詩絶句』であるがどちらも割印帳には記録がない。市兵衛の他の類似した蔵版目録「小本用短冊形二段七行蔵版目録」では、それぞれ修正や差し替えが起こっている書名である。二類の「小本用短冊形二段七行蔵版目録」の比較⁽²⁸⁾により次の事が見いだせる。

『翻譯萬国圖』は、「弁畧説／平賀先生著」と記載されている所が「桂川甫周校」に修正がおこなわれている。平賀源内が投獄されたのが安永七年であり、獄中で亡くなったのは、安永八年十二月である。この時期に「桂川甫周校」に差し替えがおこなわれたのではないかと推測する。

『古詩絶句』は、当初は一冊とし掲載されていた部分が「古絶句 西野先生輯校 六冊」に差し替えられている。『古絶句』は割印帳に記載されており、割印日は天明三年十二月である。

この「解体新書」に付けられている「大本用短冊形二段八行蔵版目録」第三番目の蔵版目録は、『古詩絶句』と記載されていることで天明三年十二月以前のものではないか、『翻譯萬国圖』に「弁畧説／平賀先生著」との記載があることから、安永八年頃以前のものである可能性がでてくる。また理論的には、この「大本用短冊形二段八行蔵版目録」には他にも改訂版が存在する可能性がある。

結論として、京都大学附属図書館所蔵の『解体新書』（請求記号「05」カ100）は、安永四年十二月廿五日以降安永七年頃まで、「解体新書」（請求記号「05」カ100）は、安永七年六月廿六日以降安永八年十二月頃までに頒布されたのではないかと考える。

むすびにかえて

書籍巻末の蔵版目録は、記録されている書誌情報（書

名、責任表示、冊数)により、出版者の出版状況や板木保有状況が窺え、その書肆が使用した複数の蔵版目録を比較し、開版や販売許可の記録簿である「開板御願書」「割印帳」や本屋仲間の記録簿と組み合わせ読み解くことで、書籍が市場に出された大まかな年代判定ができる。このような方法論を使用すれば、蔵版目録は史料としての大きな意味を持つと考える。

今回の事例に挙げた市兵衛の「大本用短冊形二段八行蔵版目録」により、『解体新書』だけでなくその他の書籍でも、その蔵版目録の改訂版の区別により、相対的な順序付けや大まかな年代確定が可能である。

(1) 国立国会図書館所蔵『雑談集』

『改訂増補』近世書林板元総覧』では、市兵衛の項目で其角の『雑談集』が元禄五(一六九二)に合梓と記載されている。国立国会図書館で閲覧した『雑談集』には、「元禄辛未歳内立春日於狂而堂燈下書」とあり刊年は元禄四年であるが、市兵衛の「大本用短冊形二段八行蔵版目録」がついていることにより、市兵衛によつて刷られ販売されたと考えられる。元禄という年代からみても合

梓ではなく、営業を開始してから版權を市兵衛が得たのではないかと考えられる。第三番目の「大本用短冊形二段八行蔵版目録」が付いていることより、安永七年頃から安永八年十二月頃までに市兵衛によつて市場に出されていた可能性が考えられる。

(2) 国立国会図書館所蔵『今日歌集』

『今日歌集』は、安永五年九月廿七日に割印を受け販売された書籍である。国立国会図書館が所蔵している『今日歌集』には、第二番目の「大本用短冊形二段八行蔵版目録」が付いていることより、安永五年頃から安永七年頃間に市場に出された可能性が考えられる。

(3) 国立国会図書館所蔵『龍門先生文集』

『龍門先生文集』は、割印帳により、宝暦十一年六月廿五日に割印を受けた全五冊の書籍であることがわかる。『龍門文集後編』というものも存在し、割印帳の記録では、明和五年九月廿七日に割印を受け、「明和五子七月竜門文集後編 全部三冊 作者竜門 俗名宮瀬三右衛門 板元売出 須原屋茂兵衛」となっている。市兵衛の蔵

版広告で取り上げられている『龍門先生文集』は「二篇三冊」の記述もあり、割印帳での『龍門文集後編』と同等である。国立国会図書館所蔵の『龍門先生文集』二編詩部一之二には、第三番目の「大本用短冊形二段八行蔵版目録」が付いていることより、安永七年頃から安永八年十二月頃までに市兵衛によって印刷・販売されていた可能性が考えられる。

(4) 大阪大学附属図書館所蔵『古言梯』

国立国会図書館所蔵の『古言梯』には、一番目の「大本用短冊形二段八行蔵版目録」が付いていたが、大阪大学附属図書館所蔵の『古言梯』には二番目の「大本用短冊形二段八行蔵版目録」が付いている。よって、国会本よりも後に市場に出されたものと判る。

(5) 大阪大学附属図書館所蔵『民間備荒録』

最初の「大本用短冊形二段八行蔵版目録」が付いており、当初の情報は「民間備荒録後編 二冊嗣出／備荒録草木圖 一冊未刻／明和八年卯年七月／東都書肆申椒堂／須原屋市兵衛梓行」とあるが、後に貼紙（図版四）が

なされている。市兵衛によって印刷・作製された書籍が、板木・書籍とも大阪の書肆秋田屋市五郎に買い取られ天保四年以降に販売されたものと考えられる。

<表三> 『解体新書』に付されていた2種の蔵版目録比較

大日本用短冊形二段八行蔵版目録		大日本用短冊形二段不定行蔵版目録	
書名	冊数	書名	冊数
徳川御書	6冊	注2)	
芭蕉翁の一葉	2冊	繪巻新編	1冊
其角神韻集	2冊	西京紀略	2冊
桑園集	3冊	興地歳時記	1冊
現の巻	2冊	大塚録	2冊
岩手山	2冊	民間曲書録	2冊
櫻なし草	5冊	龍門先生文集 二編	3冊
忠志野傳	5冊	古玉絶	6冊
片歌道のはじめ/二夜問答	2冊	注2)	
片歌草のほり道	1冊	玉元典尺牘	1冊
片歌集五集	1冊	繪巻一葉	1冊
寄文笠集	1冊	寛政歌集	5冊
はし書ふり	1冊	初編	5冊
定家書巻贈	5冊	市郎宗室集 二編	5冊
水のゆくえ	5冊	通編	1冊
徳川不斷傳 [1冊]		向風草 初編	2冊
定傳萬事 1-2冊		後編	3冊
龍門先生文集 二編	3冊	廣明神韻	1冊
大塚録	2冊	明神輝村	1冊
繪巻折衷	1冊	詩歌法帖	1冊
繪巻新編	1冊	詩字辭林	4冊
玉元典尺牘	1冊	詩学小成	4冊
品学辨疑	1冊	語語拾遺	4冊
大史聖句	3冊	四書集注	10冊
大明十三衣圖/萬國一巻并圖	2枚	増補地名簿	1冊
歴代事跡圖	1枚	製餅要説	2冊
物理品鑑	6冊	大清廣異之圖	1枚
十種千字文	1冊	四聲採選	2冊
六種千字文	1冊	書要式	3冊
猿橋神話	1冊	小学小解	1冊
宇摩海海	2冊	續橋神傳	6冊
石印集巻	2冊	大東地名考	1冊
蘭入花の園	3冊	文庫小成	6冊
生花千筋巻	5冊	尺牘集社	3冊
古書集	1冊	孝經集註	1冊
百人一首解	1冊	天球之圖	1枚
文藝	5冊	圓 繪製	1冊
しっぽく料理集	1冊	新詳地球全圖 [配巻なし]	
民間傳説録	2冊	四 繪製 [配巻なし]	
徳澤地名考	2冊	歴代事跡圖	1枚
徳徳先生文集	1冊	萬國一巻并方輿總圖	1枚
小説土平傳	1冊	大明十三省之繪圖	1枚
英府	1冊	地球一頁之圖	1枚
唐明神韻	1冊	大学抄録	1冊
大東地名考	1冊	大成年代歴記	両面挿
詩学小成	4冊	唐土古今沿革之圖 [配巻なし]	
五軍法帖	2冊	唐軍兵十七帖	1冊
常楽帖	2冊	歌麩千字文	1冊
七短書経 [1冊]		十種千字文	1冊
唐軍兵十七帖	[1冊]	六種千字文	1冊
遊戯問答	[1冊]	庵石絶句解	3冊
解標新書	5冊	内科擬要	18冊
解標約書	5冊	解標新書	5冊
名物図解	3冊	四 約書	5枚
市郎宗室集 注1)		外科擬要	2冊
詩学辭林	4冊	外科手引草	2冊
療治茶話	[1冊]	療治茶話	1冊
外科擬要	2冊	四 二編	1冊
西遊紀行	2冊	幼科種痘方	1冊
御深謙人詩集	3冊	宇摩海海	2冊
郊遊集 [1冊]		白毫寶珠	1冊
繪本いろは歌	3冊	平塚先生書論	1冊
繪本せつづの碑 注1)		芳彦帖	1冊
御所名所方角集	2冊	五軍書法帖	2冊
古今句題	4冊	常楽帖	2冊
江戸図巻	1冊	堀本三代帖	3冊
種痘方	1冊	四 源流帖	1冊
歌麩千字文	1冊	四 疊韻帖	1冊
文字	3冊	四 疊韻帖	1冊
翻譯萬國圖	[配巻なし]	倉六便笺	1冊
(未刻)		神韻	2冊
大成年代歴記	1枚	物類総呼	5冊
漢本書札	3冊	名物原案	
向風草	2冊	大名物茶入之部	2冊
今日菴集	1冊	名物切之部	2冊
四声韻選	2冊	中古茶入之部	5冊
古詩絶句	1冊	[續記之巻]注3)	
(未刻)		百人一首解	1冊
		新撰六帖	4冊
		百人一首解	1冊
		古書集	1冊
		漢文題語	1冊
		和歌の干渉	1冊
		はし書ふり	1冊
		御所めすならふ	2冊

大日本用短冊形二段八行蔵版目録		大日本用短冊形二段不定行蔵版目録	
書名	冊数	書名	冊数
和名部談抄	5冊	注3)「後茶入 園燒茶入 茶粥 茶花 水指 茶箱 茶茶盒 蓋 古瓶 部」とあり	
日本地名便覧	四冊挿1枚		
徳澤地名考	3冊	・・・第2冊目までは「文のしるべ」	
和歌総州名所志	3冊	・・・第2冊目で増加した書名	
萬國新編	5冊	・・・第3冊目で増加した書名	
本朝國家系譜	四冊挿1枚	・・・第4冊目で削除された書名	
徳川名所方角集	2冊		
御所集	5冊		
文のしほり	8冊		
片歌道のはじめ/二夜問答	2冊	・・・大日本用表方型二段不定行蔵版目録に記載のない書名	
新撰 句解	2冊	・・・大日本用短冊形二段八行蔵版目録に記載のない書名	
四 なりと川	1冊		
四 拍手千句	1冊		
四 江戸川	1冊		
四 五色板	1冊		
四 一物連歌	1冊		
四 繪本のはしり	2冊		
四 繪本調巻抄	2冊		
四 明の一葉	2冊		
四 繪巻集	2冊		
四 古今句題	4冊		
四 拾遺	4冊		
四 心学あすも見上	1冊		
四 人言草	3冊		
四 倉敷料理集	1冊		
四 しつづく通帖	1冊		
四 生花千巻の巻	3冊		
四 現の巻	2冊		
四 妙因句集	2冊		
四 権巧園集	5冊		
四 技藝	5冊		
四 宝鏡法	1冊		
四 秘宝法	1冊		
四 改正法	1冊		
四 當世御時記	2冊		
四 神代巻	1冊		
四 神代巻	1冊		
四 長明方式記	1冊		
四 道の記	1冊		
四 海國の記	1冊		
四 三冊の書	3冊		
四 神道親説令	1冊		
(未刻)			
四 御氏一統志	17冊		
四 農書古もつかう	1冊		
四 七歌書経	1冊		
四 四民/重宝 兩頁用字書大成	1冊		
四 十種千字文	四冊挿1枚		
四 萬道中記	1枚挿		
四 寺澤法書札	1冊		
(未刻)			

注1)初版には2段抜きで「日本橋北室町三丁目/東郷書肆 須原屋市兵衛」とあり
 注2)2段抜きで「日本橋北室町三丁目/東郷書肆 須原屋市兵衛」とあり

〈表四〉「大本用短冊形二段八行蔵版目録」にみえる書籍の割印日もしくは刊年調査

	上 段	割印日(注1)	下 段	割印日(注1)	
一 丁 表	俳諧明題集	5冊 宝暦13年12月25日*	片歌道のはじめノ二夜問答	2冊 宝暦13年12月25日	
	芭蕉桐の一葉	2冊 <享保16年10月>	片歌草のはり道	1冊 [宝暦13年]	
	其角雑談集	2冊 [元禄4刊]	片歌善宣集	1冊 [明和4刊]	
	桑岡集	3冊 <宝暦9年12月>	哥文要語	1冊 明和2年12月25日	
	硯の筏	2冊 <宝暦5年12月23日>	はし書ふり	1冊 [明和3序]	
	岩手山	2冊 [明和5年刊]	寒葉斎畫譜	5冊 宝暦12年1月25日*	
	根なし草	5冊 [宝暦13年刊]	水のゆくえ	5冊 明和元年閏12月24日	
	志道軒傳	5冊 [宝暦13年刊]	俳諧不断樓	[1冊] [明和4年]	
一 丁 裏	左傳風事	12冊 明和4年12月23日	大明十三省圖ノ萬国一島界圖	2枚	
	龍門先生文集	3冊 宝暦11年6月25日	歴代事跡圖	1枚	
	大疑録	2冊 明和4年3月27日	物類品臚	6冊 明和元年6月25日	
	経義折衷	1冊 [明和元刊]	十體千字文	1冊 同定不能	
	陸賈新語	1冊 [宝暦12年]	六體千字文	1冊 宝暦13年6月22日	
	王元美尺牘	1冊	猿橋碑銘	1冊 宝暦13年12月25日	
	易學辨疑	1冊 [明和4刊]	字畫瀟海	2冊 [宝永2]	
	太史華句	3冊 明和6年4月19日	石印集館	2冊 <宝暦2年6月>	
二 丁 表	抛入花の園	3冊 明和3年11月6日	寝惚先生文集	1冊 [明和4年刊]	
	生花千筋籠	5冊 明和5年9月27日	小説土平傳	1冊 [明和6自序]	
	古言梯	1冊 明和5年9月27日	笑府	1冊 同定不能	
	百人一首解	1冊 明和8年9月26日	唐明詩鍵	1冊 宝暦13年6月22日	
	文菜	5冊 安永7年3月26日	大東地名箋	1冊 明和4年6月24日	
	しっぽく料理集	1冊 明和8年11月9日	詩學小成	4冊 明和6年6月24日	
	民間備荒録	2冊 明和8年12月24日	五筆法帖	2冊 <宝暦8年5月>	
	信濃地名考	2冊 [安永2刊]	常盤帖	2冊 明和8年12月24日	
二 丁 裏	七観音経	[1冊] 安永2年9月28日	療治茶談	[1冊] 明和7年12月25日	
	唐草真本十七帖	[1冊]	外科撮要	2冊 明和5年12月25日	
	遊戯画帖	[1冊]	西遊紀行	2冊 明和8年6月24日	
	解體新書	5冊 安永4年9月27日	四溟陳人詩集	3冊 [明和九刊]	
	解體約圖	5冊 安永元年12月25日	郊華集	[1冊] 明和8年9月26日	
	名物画譜	3冊	繪本いろは歌	3冊 安永3年12月25日	
	市隠草堂集	5冊 安永4年12月25日	繪本せつの時	3冊 安永3年9月28日	
	詩学楷梯	4冊 安永4年12月25日	俳諧名所方角集	2冊 安永4年12月25日	
三 丁 表	古今句鑑	4冊 安永6年12月24日	大成年代広記	1枚 天明4年9月26日*1	
	江戸図鑑	1冊 安永5年12月26日	滝本書札	3冊	
	種痘方	1冊 安永7年6月26日	向風草	2冊 天明4年3月26日*2	
	欧陽詢千字文	1冊 安永5年9月27日	今日哥集	1冊 安永5年9月27日	
	文字	3冊 [宝暦8年]	四声韻選	2冊 安永3年9月28日	
	翻譯萬国圖	(記載なし)		古詩絶句	1冊
		未刻		未刻	

[注1] * 割印帳に初出の割印日を採用

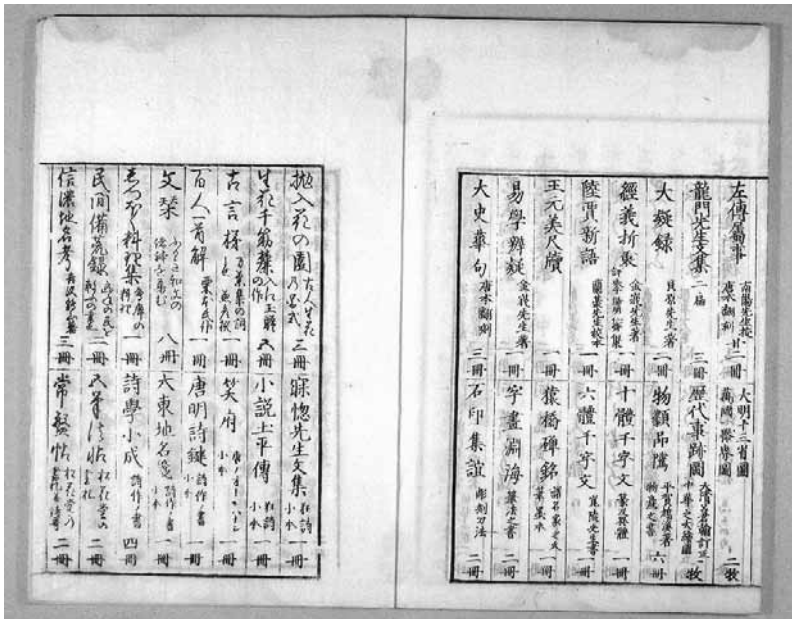
*1 割印帳には「再板」とあり

*2 割印帳には「二篇全三冊」とあり

<> 板元が須原屋市兵衛でない時の割印日

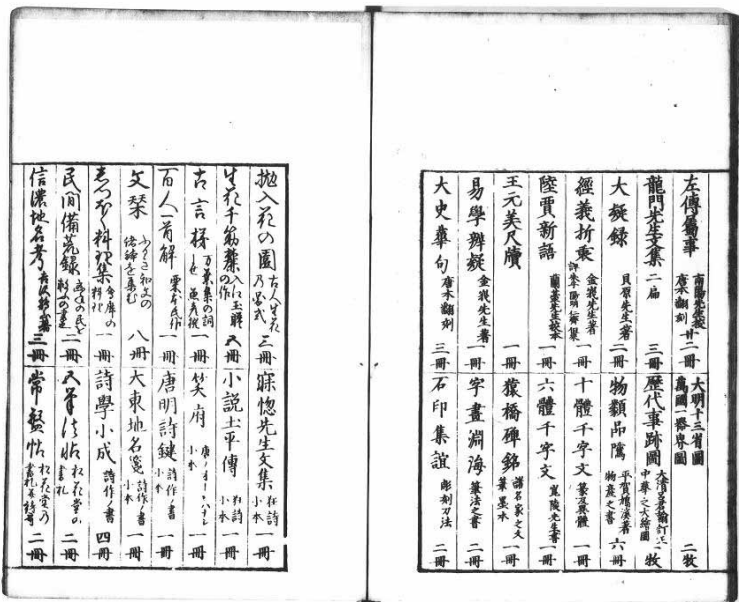
[] 日本古典籍総合目録データベース

図版一 杏雨書屋所蔵『解体新書』（請求記号常陸六三）



図版二 京都大学附属図書館所蔵

『解体新書』（請求記号七〇五ノカノ一〇〇）



図版三 杏雨書屋所蔵『解体新書』（請求記号杏雨一五二）

左傳箋事	南陽先生著 二冊 大明十三省圖
龍門先生文集	虎米湖刻 二冊 萬國傑書圖
大疑錄	貝原先生著 二冊 物類序陽 小倉旭著 六冊
經義折衷	金龍先生著 一冊 十體千字文 荻原兼一著 一冊
陸賈新語	蘭亭先生著 一冊 六體千字文 荻原兼一著 一冊
王元美八廣	一冊 蕪湖碑銘 謝名義文 一冊
易學辨疑	堂從先生著 一冊 字畫湖海 葉法善 一冊
大史華句	唐本翻刻 三冊 石印集說 彰和刀法 二冊
拋入の園	古人中花 三冊 寐惚先生文集 和詩 一冊
げん千筋藤の作	六冊 小説士平傳 小説 一冊
古言採	百葉集の詞 一冊 笑天府 一冊
百人一首解	葉衣作 一冊 唐明詩鍵 詩作書 一冊
文琴	八冊 大東地名選 詩作書 一冊
老のふ科採集	一冊 詩學小成 詩作書 四冊
民間備荒録	二冊 八巻信收 和歌学の 二冊
信濃地名考	三冊 常盤帳 和歌学の 二冊

図版四 大阪大学附属図書館蔵『民間備荒録』

七観音題	明解抄入 全 濟活書後 津田山田著 全
唐集要采十七帖	明解抄入 全 外母提摩 吉本題子述 二冊
速成出胎	和 而述紀行 二冊
解體新書	和 四選陳人祥集 三冊
約圖	同 五枝 荻華集 全
名物画帖	和 三冊 倫才 方以敬 吉信集 三冊
東都書肆	日本橋北安町三丁目 須田屋市兵衛

民間備荒録	全二冊
天保四年	二月補刻
大坂書林	心齋橋通南久全野町四丁目 秋田屋市五郎

【注】

- (1) 高柳眞三、石井良助編『御觸書集成』岩波書店 一九三四・一九四一
- (2) 辻達也校訂『撰要類集』続群書類従完成会 一九六七
一・一九七九
- (3) 石井良助編『御仕置例類集』名著出版 一九七一・一九七四
- (4) 『司法省原編』…法制史學會編…石井良助校訂『徳川禁令考』司法省藏版 創文社 一九五九・一九六一
- (5) 東京大学史料編纂所編纂『市中取締類集』覆刻「版」(大日本近世史料) 東京大学出版会 一九九九・
- (6) 大阪府立中之島図書館編『大坂本屋仲間記録』大阪府立中之島図書館 一九七五・一九九三
- (7) 慶応義塾大学附属研究所斯道文庫編『江戸時代書林出版書籍目録集成』(斯道文庫書誌叢刊…之二) 井上書房 一九六二・一九六四
- (8) 大阪図書出版業組合編『享保以後大阪出版書籍目録』復刻版 龍溪書舎 一九九八
- (9) 朝倉治彦監修『割印帳 東博本』(書誌書目シリーズ八三) ゆまに書房 二〇〇七
- (10) 長友千代治著『江戸時代の書物と読書』東京堂出版 二〇〇一
- (11) 小泉吉永編『近世蔵版目録集成…往来物編』岩田書院 二〇〇五・二〇〇六
- (12) 朝倉治彦監修『近世出版広告集成』(書誌書目シリーズ一) ゆまに書房 一九八三
- (13) 小泉吉永編『近世蔵版目録集成…往来物編』(岩田書院影印叢刊 四・一六) 岩田書院 二〇〇五・二〇〇六
http://www.bekkoame.ne.jp/ha/a_r/E_2006_01.htm
- (14) 二〇〇九年十二月三十一日確認
- (15) 『解体新書』普及・復刻版 出版科学総合研究所 一九七七
- 原本：太田典礼蔵書・安永版刊本
『解体新書』復刻版 医学古典刊行会 中尾松泉堂書店(発売) 一九六七
- 岩崎克己著『解体新書の研究』(東洋文庫六〇四) 平凡社 一九九六 昭和一三年刊の再刊
- 小川鼎三「近代医学の先駆」(『日本思想体系』六五 洋学 下) 岩波書店 一九七二
- 小川鼎三著『解体新書：蘭学をおこした人々』(中公新書一六五) 中央公論社 一九六八
- 酒井恒訳編『ターヘル・アナトミアと解体新書』名古屋大学出版会 一九八六
- 藤野恒三郎著『杉田玄白から福澤諭吉へ…「解体新書」

から「学問のすすめ」へ』 「出版者不明」 「一九一」
酒井シズ訳 『解体新書』 新装版（講談社学術文庫） 講談社 一九九八

(16) 寺田光世 『解体新書』 初版本が図書館書庫で見つかる」
Kyokyo 一一三号 二〇〇四年三月

参照 http://www.kyokyo-u.ac.jp/KOHOU/113/topic_s.pdf [二〇〇八年九月八日確認] *二〇〇九年十二月三十一日時点では削除されていた。

*京都教育大附属図書館所蔵『解体新書』は、版本の版面および刊記の情報（室町二丁目）から、初刷本ではなく、かなり後刷であると考えている。また、書籍に挟まれていた当時の領収書および表紙・紙料から、関西へ版權が流れた後の書籍の可能性を検討する必要があるかと考えている。

(17) 鷺尾厚著 『解体新書と小田野直武』（郷土の研究一）翠楊社 一九八〇

(18) 拙稿 『重訂解体新書』の出版に関する一つの考察』（『書物・出版と社会変容』三号二〇〇七）

(19) 『御仕置例類集』 天保類集 四拾四之帖 侍出家社人御用達町人小もの等の部 奇怪異説異法之類

宮武外骨著 『筆禍史』 改訂増補再版 朝香屋書店 一九二六

牧野善兵衛著 『徳川幕府時代書籍考』 ゆまに書房 一九七六

*大正元年刊の複製

(20) 須原屋市兵衛の堂號

(21) 拙稿 「史料から見た『物類品鑑』出版経緯に関する一考

察」（『書物・出版と社会変容』五号二〇〇八）

(22) 大阪府立中之島図書館編 『大坂本屋仲間記録』 第二卷

精文堂出版 一九八八

(23) 同掲

(24) 大阪府立中之島図書館編 『大坂本屋仲間記録』 第一三卷

精文堂出版 一九八七

(25) 浜田啓介 「近世後期に於ける大阪書林の趨向」 『近世文芸』 三号 一九五六

(26) 前掲 「史料から見た『物類品鑑』出版経緯に関する一考察」

(27) 「大本用長方形型二段不定行蔵版目録」には『内科撰要』十八冊の記載があるが、計画として十八冊があり、この時点では実際に十八冊そろってなかったと考える。

『内科撰要』は、三冊ずつ分割して十八冊が出版された。割印帳のデータでは、寛政五年九月に最初の三冊が割印を受け、寛政八年三月二十七日に四一六（三冊）、寛政九年六月二十五日に七一九（三冊）、文化五年十月に板元河

内屋儀助（大阪）、売出須原屋善五郎で五編三冊「一一一五」、板元河内屋儀助、売出前川六左衛門で文化七年十二月二十三日に一六一八巻が同じく割印を受けている。大阪の開板御願書には、享和元年十一月に四篇三冊の出願をし、享和元年十二月二十四日に許可を紀伊國屋卯兵衛が受けている記録と、一三一一五の三冊を河内屋儀助文化四年十月出願し、文化五年三月に許可がある。

後者には附記が記録されている。「本書の一より九に至る九冊は江戸室町二丁目須原屋市兵衛方にて板行したるが後その板木を大坂紀伊國屋卯兵衛方にて買いうけ同家にて十より十二に至る三冊を板行したるを更に文化四年七月一より十二に至る板木を河内屋儀介（ママ）方にて買いうけ此度その十三より十五に至る三冊を新に板行出願に及びその許可を得たるなり」この付記により、十八冊そろっておらず、『内科撰要』の記載は寛政五年、寛政八年、寛政九年のどの時期のことか断定不可と考える。

(28) 国際日本文化研究センター所蔵海野文庫『東藻會纂』（2冊とも）

【付記一】

「寛政二戊年改正板木総目録株帳」の調査においては、住吉大社文教課 権禰宜 川畑勝久様、「文化九壬申年板

木総目録株帳」の調査では、大阪府立中之島図書館司書の皆様の多大なるご好意を賜りました。また、書誌学調査において国立国会図書館、杏雨書屋、東洋文庫、印刷博物館をはじめとする全国の機関でお世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。

【付記二】

この論文は、日本出版学会二〇〇七年春季研究発表会（大正大学巣鴨校舎二〇〇七年五月一九日）にて、口頭発表した内容をもとに、その後の杏雨書屋、印刷博物館での調査結果を加えた内容をE A J R S二〇〇九年年次会議（イギリス、ノーリッジ二〇〇九年九月十六日）にて、口頭発表した内容に加筆したものである。

【付記三】

本論文は、鈴浜学術財団の平成二十年度研究助成を受けた研究成果の一部である。